
異世界に召喚された殺し屋で天才科学者な少年

竜人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に召喚された殺し屋で天才科学者な少年

【Nコード】

N0399K

【作者名】

竜人

【あらすじ】

殺し屋で天才科学者な少年、紅野雪はある日、少女に巻き込まれて異世界に召喚された。少年は異世界で気ままに生きることを決意。この物語は少年が異世界でトラブルを解決したり、いつの間にか、最強になっていくファンタジーである。

ぶるる〜く

拝啓 地獄にいる殺し屋な父さん、天才科学者な母さん。どうやら俺は……………

「ようこそ異世界へ。勇者のお二人様」

……………異世界に召喚（巻き込まれて）されたようだ。

話しは数時間前にさかのぼる。俺こと紅野雪（性別男）は父親に政府公認の殺し屋で母親は天才科学者を持つ普通ではない高校生である。もちろん二人の技術や体質は受け継いだ。まあ両親は2年前に事故で死んだが、そのせいで政府から依頼（強制）で何人もテロリストやらマフィアなどを殺しまくったが

閑話休題

で放課後、帰ろうと思って下駄箱を見ると手紙があった。中身を見てみると【屋上に来て下さい】と書いていた。差出人は神崎結だった。

神崎結。成績優秀、容姿端麗、スポーツ万能の持ち主で、毎回、彼女はテストは学年一位。ファンクラブは一万人以上いると言われている。

……で屋上に来た俺を待っていたのは当然神崎結で

「私と付き合ってください!!」

告白されました。……けど

「なんで平凡な俺を？」

俺は学校などでは平凡な男子高校生を演じており、髪も元々生まれつき色が白だったが黒く染め、瞳も翡翠色だったからカラコンで黒目に見せている。

「それは／＼／」

神崎が理由を言おうとした時、神崎の足下に謎の魔方陣が浮かび上がる。

「ひゃっ!？」

驚いた神崎は飛び上がり、俺に抱きつく。だが魔方陣は神崎を追いかけるように移動し、俺と神崎は魔方陣の中心に立つようにして、
魔方陣は光り輝いた。

で現在に至る。神よこれだけは言わせる。

「俺、なんかした？」

王の部屋と客室

現在、俺は召喚をした少女、ユア・メイに案内され王の部屋に向かっています。ちなみに彼女、お姫様である。

「で私達はなんで召喚されたの？」

神崎はユアに友達感覚で結構重要なことを聞く。あんたよく位が高い奴に平然と話せるなあ

「実はこの世界では魔王が現れ、人類の危機にたたされています。他の国では戦争を初め、少しでも領地や兵士、財力を手に入れようとしています。そのため、我が国はなんの力も無いため、こうやって勇者に頼るしかないのです。」

おーけーぶっちゃけていうとただ単に力が欲しいから勇者を召喚。勇者に魔王を討伐させようとな。さらに話しを聞いている。もしかしたら魔王討伐後、戦争をして大帝國を築こうとしてるしぜってー戦争に出されるよ勇者。つか話しを聞いた神崎は自分に任せてみないなことを今、ユアに話してる。………もしかして神崎って勉強以外って馬鹿？

「着きました。王、私の父が待っています。」

さて色々考えていたら王の部屋の前に着いたようだ。なんか無駄な
装飾がされた扉だな。

ギイイ

どうやら扉が開いたらしく、部屋の中には兵士や大臣がいてそして
一番奥に大きな椅子に座っている王がいた。
とりあえず王の前に俺達は向かい、膝を立てる。途中で兵士の隊長
らしき人から殺気の籠もった視線、大臣達からは多分どうやって使
おうという道具を見るような視線を感じた。

「おおそなたらが勇者か」

「はい!!--」

「おそろしく」

神崎は元気一杯に俺は自信なさげに言う。だってさあ殺し屋が勇者
つてあり得ないって

「ふむ。ではそなたらは魔王を倒してくれるか?」

「はい!!--お任せ下さい。」

神崎……………冥福を祈る。多分死ぬぜお前、兵士達に慰め者にはなるなよ。

「お主、返事はどうした!!」

どうやら大臣の一人は返事をしない俺にご立腹なようだ。

「あっ!?!いえただ突然のことで混乱してて、少し考える時間をくれませんか?」

「わかった。では勇者達を客室にお連れしろ。では返事は明日聞こう。色よい返事を待っておる。」

「ありがとうございます。」

嘘八百を吐いた俺だが、どうやら俺のことを信じたらしい。さてどうやって抜け出そうと考えながら王の部屋から出る俺であった。

さて今客室にいます。中は結構質素でベットと50冊の本が納まる本棚があるだけだった。一応、神崎の部屋を見てみたが、豪華だっ

た。色んな装飾が施され、ベットは王が使うようなもので机や椅子、お菓子があった。何、この差別って眩いてみたら神崎が

「もし良かったら／＼一緒に寝てもいいよキャツ／＼」

……何を期待してんだ？まあ十中八九王の命令だろう多分、勇者になればこれぐらい待遇が良くなるぞって感じで。つか監視されるし。天井に2人、右の部屋に3人、左の部屋に同じく3人。全くなってるない。気配バレバレだし、天井から足音聞こえるつう〜の

……とにかく本を読むか。俺は適当に本を二冊取り出す。題名は……初級魔法集。成る程ねえ、試しに1ページ目を開くと、簡単な灯りを作る魔法についてが書かれており、呪文、構成術式、イメージ、魔法属性使用魔力量という風になっていた。今、気付いたけどこっちの文字が俺が知ってる文字と全然違うのに読めるという事実に気付いた。まあ読んでたら書けるようになるだろう。もう一本の題名を見ると中級魔法集と書かれてた。

うん面白くなりそうだ。そう思った俺は二冊を速読術、並立思考、瞬間記憶術を使い、同時に読み、わずか5分で読み終わり、完璧に覚えた。

「さて全部覚えるか」

そして俺は嬉々として本棚に向かった。

一時間後

50冊読み終わった俺はさっそく魔法を使おうとしていた。

「監視が邪魔。幻術は確か《風よ惑わせ（イリュージョン）》」

これにより一瞬、風が吹き監視には寝たようにみせた

「さて何をするか」

そして俺は魔法の特訓を始めた。

城から逃亡そして本来の俺

深夜二時

誰も眠る丑三つ時、俺は装備を整えていた。手には左右それぞれ観賞用の盾を魔法で形を変えたナイフを逆手で握っている。

「さて行きますか」

そして部屋の扉を蹴破り、廊下に出る。そこに兵士が二人いたが即座に首にナイフを差し、抜くと血が吹き出し、返り血を浴びるが関係ない。すぐに俺は走りだし、裏口を目指す。

一つ目の曲がり角を曲がると大剣を振るう兵士がいたが身をかがんで避け、一気に懐に入り、頸動脈を切り裂く。そして大剣の兵士の後ろに結構な数の兵士がいた。

「《氷よ貫け（アイスジャベリン）》」

だが俺は慌てず、魔法で細長い八面体の氷を数十本作りだし、兵士を貫く。そしてまた俺は走りだす。

二つ目の曲がり角を曲がるとローブを着た男性がいた

「《火よ放て（ファイア）》」

相手は拳大の火を放つが俺は避けず、

「《水よ撃ちだせ《アクアバレット》》」

水の弾丸を撃ちだす。火と当たるが火は簡単に消え、ロープを着た男性の心臓付近に風穴を開けた。それをみた俺はまた走りだす。

最後の曲がり角を曲がると、今度は兵士ではなく斧を持った人型の岩人形通称ゴーレムが立っていた。ゴーレムは斧を振り下ろすが俺はサイドステップで避け、

「《氷よ貫け《アイスジャベリン》》」

細長い八面体の氷をゴーレムに放つ

ガキン

がゴーレムの体に弾かれる

「硬い………なら《火と風よ荒れ狂え《テンペスト》》」

そしてゴーレムの足元から火を纏った竜巻が起こり、ゴーレムを破壊していく。それをみて俺は残ったゴーレムの右腕を背負い裏口から走り抜け、森の中に消えて行ったのである。

数時間後

現在俺は森から走り抜け、ある湖にいる。さて

「ようやく一息つける」

だってさあずつと追いかけてくるんだぜあいつら、バリバリ気配出して。

「しかし血がべつとりついてるなあ」

と俺が着ていた制服をみる。元々の黒かったのが真っ赤になっている。ちなみに今水浴び中だ。

さて体についた返り血を洗い流したし、姿を変えるか

「《水よ清める（クリア）》」

まずクリアで制服についた血と髪の毛の染料を落とす。

「《土よ造りかえよ（クリエイト・改）》」

次にクリエイト・改で制服を黒のコート、黒のズボンに変える。ちなみにクリエイトは材料を使って一から物質を作り出す魔法だが術式や呪文を改良して物質を改造する魔法にした。こういう風に改良した魔法を改良魔法チヨーンナップスベルという。

そして俺は水浴びをやめ服を着ていく。そしてカラコンを外す。最後にポケットに入ってた急速髪成長剤（自分作）を飲み、髪を肩ぐらいに伸ばしゴムで後ろで纏める。

「さてとどんな感じかなあ」

と湖に写った自分を見つめる。白い長髪に翡翠色の瞳に黒いコート。

「……………うん。いつもの俺じゃねえ」

だって見た見た目外人じゃん。しかもこの世界黒目黒髪ていないらしいし。これで城から手配書が出されても捕まらない！！

「後、武器だな」

そして俺は持つてきたゴーレムの右腕を見る。ぶっちゃけこいつを材料にするというだけで持つてきたのだ

「まずはどんな材料なんだ？《風よ調べの力を我が瞳に宿せ（サーチ・眼）」

サーチ・眼は周りの様子を調べる魔法、サーチを改良して見たものの詳細情報をサーチより詳しく調べるものだ。ちなみにこれを調べた結果は

名称 ゴーレムの右腕

材質 オリハルコン ミスチル

付加能力 なし

………出た。オリハルコン、ミスチル。ゲームに出てくる代表的な材料だ。いい拾い物したな俺。

「さてとつとと造るか《土よ造りだせ（クリエイト）》」

そしてゴーレムの右腕は徐々に粒子になり、粒子が新たな形を作っていく。そして造り出したのは

「やっぱり日本刀でしょ」

薄い赤色の刀身、鍔は青の刀だった。ちなみに余った材料で赤色の鞘を造った。

「さて銘を何しようか……赤、あか、紅、紅歌。うん紅歌に決定だな」

さて後、魔方陣を地面に書いて紅歌と服に付加能力を付けるか

二時間後

さて服に防刃や防魔や防御力上昇など、刀には切れ味上昇、魔法吸収、耐久力上昇などを付加した俺は魚をとって焼き魚を食っていた

「はぐはぐ結構うまいなあ」

さて食べ終わり、昼寝をしようとした矢先、

どろろおおおおおん！！

湖の向こうから何かが飛んできた。

女性騎士と古龍+ との遭遇

はい。湖の向こうから何か飛んで来ました。受けとめてみたら……

「グツ、逃げる!!」

青いドレスの上に鎧を着た女性でした。ぶつちやけ、どこの食いしん坊な英霊だ、と突っ込みたいがメチャクチャケガしてるからサーチ・眼で調べてみる。

「《風よ調べの力を我が瞳に宿せ（サーチ・眼）》」

名称 アリス・キングダム

筋力 AA+

魔力 AA-

魔力量 A+

体力 SS+

自然治癒 S +

損傷状態

右肩 脱臼

左腕 骨折

右足 アキレス腱断裂

左足 内出血

肋骨 2本骨折

右肺 肋骨の1本が刺さる

.....パラメーター高っ！？つかケガヤバ過ぎ！！

「おい！？大丈夫か！？」

「私の心配はいいから逃げろ！！」

ゴフッ

……いや血吐いてる奴ほっとけないって

ウオオオオオオオオ！！

「なんだ！？」

「くっ来たか！！」

「何が！？」

どじおおおおん！！

なんか衝撃音が聞こえたので見てみると……

ウオオオオオオオオ！！

なんかデカイどこぞのエヴァ似の龍+モンスターがいました。

「……………バラム。やっぱり私は死ぬ運命か。おいその少年、あの龍はバラムと呼ばれる古龍種でランクはEXの化け物だ。逃げる、私はもう長くない。私を置いて逃げる」

……………何シリアスモード入ってんのこの人は？つか知ってんけどバラム。つか客室の本棚の本って何でも揃ってたし、モンスター図鑑やら料理本やら世界情勢やら初めてのギルドやら

閑話休題

まあとにかく

「バラムを倒せばいい話でしょ」

「なっ!？」

なんか反論しそうなので抱えて木の幹の所に座らせる

「さて行きますか」

するとバラムが右腕？を俺に向ける。すると近くにいた鳥頭の奴が槍を構えながら飛んで来た。

「ガーゴイル、全く動きが単調過ぎ《氷よ貫け（アイスジャベリン）》」

まず細長い八面体の氷でガーゴイルを撃ち落とす。すると今度は湖から三匹の大蛇が襲い掛かる。

「リヴァイアサン、ランクAのモンスターが三匹も出るなよ《雷よ滅せよ（スパークインパクト）》」

俺は両手を前に突きだすとそこから雷の砲撃がリヴァイアサン三匹を飲み込む。が今度はリヴァイアサンの後ろから大量の虎が出てくる。

「いやアクアタイガーってお前ら棲息地違うだろ《雷よ叩き込め（サンダージャッジ）》」

空に雷の大槌が造り出され大量のアクアタイガーを全て叩き潰す。そして俺は初めて攻めに出て、足に魔力を込め湖の上を駆ける。それを見たバラムはまた右腕？を俺に向ける。すると湖の向こうの森から弓矢を持った大量の緑の人型が出て来て矢を放ってくる。それを俺は避け、

「ゴブリンっていきなりランクEの雑魚になってどうする《火と風よ戦場より荒れ狂え（テンペスト・広）》」

ゴーレムの時より何十倍の大きさの火を纏った竜巻を造り、森の大半を道連れにゴブリンを灰にさせる。残るはバラムのみ。バラムもそれを知ったのか背中 of 皮膚と鱗を突き破り、翼を出し、空を飛んで突っ込んでくる。

「それにしても本当に黒い鱗と翼以外エヴァ○ゲ○オンに似てんなあ」

そうなのだ、メチャクチャ似てるのだ。

閑話休題

でバラムと後、3メートルとなった時、バラムの口に光の粒子が集まりだしたので足の魔力を爆発させ一気にバラムの首の下に移動して（嘘っ！？瞬動できちゃた）紅歌を抜刀してその勢いでバラムの首を一刀両断する。

SIDE アリス

あいつは何者なんだ。ランクBのガーゴイルにランクAのリヴァイ

アサン三匹、同じくランクAのアクアタイガーを一撃で倒し、あのバラムの首を一刀両断だと！？あり得ない。あの少年は何者なんだ。そんなループ気味な考えをしているといつの間にか目の前に少年がいた。

「ほら倒してきたぜ」

「あつああそうだな」

グッやはりもう体がもたない。

「ほら我慢すな《水よ癒せ（ヒール）》」

どうやら少年は治癒魔法を使っているらしいが……やはりダメか。そもそも治癒魔法は突き指程度を治したり、痛みを軽減する魔法だ。

「あゝもゝ何で治癒魔法これしかないかな。術式はあゝやってすると呪文が長くなるが仕方ない。《水よ戦場より帰りし我が戦友に大いなる力より癒せ（ヒール・極）》」

何！？改良魔法だと！？こいつ本当に何者なんだ。というよりケガが全治してしまった。
チューンナップスベル

「すまん感謝する。あと厚かましいがさっきの改良魔法改良時間はどのくらいだ？」
チューンナップスベル

あれほどの規格外な改良だ膨大な時間がかかったに違いない。

「ん？ああヒール・極ね。今、さっき即席で造っただけど」

「はあああああ！？」

「おお！？どうしたいいきなり？」

柄にもなく叫んでしまった。あり得ない過ぎるぞこの少年。

「すまん、ちょっとなそれよりあなたの名前は？」

「俺の名前？スノウ、スノウ・クリスタルだ。よろしくアリス・キングダム」

「何故私の名前を！？」

「実は最初、アリスを受け止める時、魔法でケガの状態調べた際、偶然な」

成る程あの時のか。私の特殊スキル聖霊の瞳で術式を見たが見たことない術式だったのはこいつの改良魔法チューンナップスベルだったからか。

「ちよつと見回り行ってくるわ」

と少年、スノウが後ろを向く。

「すまんが使わせもらっぞ《風よ調べの力を我が瞳に宿せ（サーチ・眼）》」

名称 スノウ・クリスタル

筋力 E X

魔力 E X

魔力量 E X

体力 EX

自然治癒 EX

特殊スキル

殺人技能 EX

魔法開発 EX

無限回復・魔力 EX

敵音感知 EX

………パラメーター凄すぎ

女性騎士とギルドへ

見回りをした後、アリスを喋って、気ままに旅していこうと決意。アリスと一緒に旅していいか？と聞いたなら

「別にいいが魔法とか道中教えてくれるか」

とかえされた。そんなに魔法うまいのか俺修得時間30分の俺が…

……

閑話休題

さて現在、ギルドに登録してないと言った所、アリスが呆れた顔になりギルドに登録するためトリミア王国に向かっています。ぶつちやけ俺が逃げた城がある国です。

「それよりその袋はなんだ？」

「これか？」

そう今、ギルドでお金とポイントに換金してくれる。バラムの瞳やリヴァイアサンの牙、大量のアクアタイガーの尻尾。更に良質の武器や防具になるバラムの鱗やリヴァイアサンの鱗、アクアタイガーの毛皮を一つの手のひらほどの袋を不思議でたまらないのだ。

「ああぶっちゃけ何？」

「こいつは無限回廊インフィニティスペースって言って、この中にどんなに物を入れても入る代物だ。しかも食べ物を入れても腐らないし、重量も変わらない旅人の必須アイテムだ。ちなみに私の武器も入ってるぞ……………折れているがな」

アリスさん……………自分で言って落ち込まないで下さい

「修理しましょうか？」

ガシッ

「頼む、予備の無限回廊インフィニティスペースあげるから修理してくれ」

「分かった、分かったから手を離してくれ！！痛たたた」

「すつすまん！？で修理してくれるのか」

ウルウル

……………どんだけ思い入れがあるんだよ武器に。

がさごそ

「はい。早速だが修理してくれないか」

で渡されたのは

「エクスカリバーってますますあの食いしん坊英霊じゃん。取り敢えず《土よ元々の姿に変える（リペア）》」

真つ二つになったエクスカリバーを取り敢えずくつつける。

「ありがとう、ありがとう」

泣きながらお礼言つなー！！

「あのさちよっとこいつ調べていいか？もしあれだったら、今度壊れないよう付加能力与えるけど」

「本当か！？是非頼む」

……………何故だろつ犬の耳と尻尾が見えるのは

「まあいいか《風よ調べの力を我が瞳に宿せ（サーチ・眼）》」

名称 エクスカリバー

材質 オリハルコン ミスリル 王鋼

付加能力 体力上昇 自然治癒上昇

切れ味 D -

耐久力 E +

威力 A +

脆っ！？よくバラムに挑んだなこの人。

「なあアリス、ギルドランクってどれくらいだった？」

「いきなりなんだ？まあギルドランクはAだが」

「……………そうか」

いやさあこの人、どんだけ戦闘技術高えんだよ。

「おいどうした？」

「ん？ああとにかく付加するぞ」

「分かった」

数時間後

さてアリスのエクスカリバーの全パラメーターの上昇や魔力回復を付加させ、アリスがご機嫌なようですピードアップしてトリミア王国に予想以上早く着いたのだ。

「これがトリミア王国か」

「ああ今、武力がないが商業が一番栄えてる王国だ」

あの嘘つき王様が

「どうした？」

「いや何でもない。ギルドってどこだ？」

「それならあっちだ。」

と連れられたのはケルベロスが描かれた看板が立てられた建物だった。

「入るぞ」

「ああ」

ギイ

「……………いらっしやい」

中は酒場みたいになっているが受付の女性しかいなかった。

「アリス、他のギルドランカーがいないけど？」

「確かに。すまん受付よ、他のギルドランカーはどうした？」

「……………はい、昨日城で多くの兵士が殺され、さらに犯人を追いかけた兵士がモンスターに貪り喰われたのでこの国に住んでいる全てのギルドランカーは徴兵されました」

うわー俺の責任じゃん。

「分かった。ではこいつのギルド登録を頼む」

「……………了承。名前を提示してください。」

「スノウ・クリスタル」

「……………入力。完了。では受け取って下さい」

出されたのは白いカードだった。

「ああそれとこいつと山分けで換金してくれ」

とアリスがバラムの瞳などを出す。するとまあ当然だが受付の女性が見えなくなる。

「……………分かりました。少しお待ちを」

すると受付に置かれた物を全部持っていく。何者？

「《風よ調べの力を我が瞳に宿せ（サーチ・眼）》」

名称 フェアリーゴーレム

筋力 SS+

魔力 B-

魔力量 B-

うか俺、調べ過ぎ。……………まさか人間じゃないとは。ってい

「……………お待たせしました。ギルドカードを提出して下さい」

俺は白いカードを、アリスは赤いカードを出す。

受け取った受付のフェアリーゴーレムはそれを見つめるとカードが

徐々に金の装飾をされた黒いカードになっていく。
変化が終わると

「……………終わりました。金貨50枚ずつと共にカードを渡します。」

カードと金貨が入った袋二つ渡された。

「さて食べにいくぞスノウ」

袋を無限回廊インフィニティスペースに入れた途端、アリスに引っ張られる

……………多分大丈夫かなお金

女性騎士とお食事、そして……

現在、白銀の雪で食事中です。

「野菜炒めと焼き肉おかわり!!」

「……………アリスさん、何回おかわりしてんだ？」

「ん？175回だが？」

「食い過ぎだ」

さて俺の名前、スノウにちなんで白銀の雪っていう店に連れられたんけどまあ俺の本名、紅野雪じゃなくスノウ・クリスタルだし、嬉しかったんだが……………

「お金、足りんですか？」

「大丈夫だ。ここは安いからな」

もぐもぐ

「はあ食つか、お姉さんピザひとつ下さい」

「今まで食べてなかったのか？」

もぐもぐ

「だってお金がね。おっきたか」

もぐもぐ

「そっいや、スノウって何歳だ？」

もぐもぐ

「18歳。あっアリスさんは何歳？」

もぐもぐ

「……………16。もっと年上だと思ってた」

もぐもぐ

「詳しくいえば？」

もぐもぐ

「……………27歳」

もぐもぐ

いやいやどんだけ老けてんのこの顔

数時間後

さてアリスさん。年下だからさん付け……………まあいいかギルドから見れば先輩だし。でアリスさんのおかわりが500回を越えた。

「ふう〜満腹だ」

「当たり前です」

さて店を出ようとした時、

「オラツ金出せ!!」

.....強盗集団が現れた。

「っておい何でだよ」

「どうするスノウ?」

「いや、どうするって」

「何、喋ってやがる貴様!?!」

なんか雑魚が殴ってきたので当たる前に

「《風よ潰せ(ウインドストライク)》」

雑魚の頭をスイカみたいに破裂させる。

「貴様ああああ！！殺せええええ！！」

なんか一斉に襲ってきた。

「スノウ……………あんたって本当に凄いな。色んな意味で」

「これでも殺し屋稼業は長いもんでね」

そして近づいた雑魚一人を紅歌を抜刀し、その勢いで首と胴体をおさらばさせる。

「まず一人目」

「うわあああああ！！」

「おおおおおお！！」

「てりやああああ！！」

今度は雑魚三人襲ってきたので瞬動で後ろに回り、横に一閃。一気に雑魚三人を殺す。

「次は誰が死にたい？」

「わああああああああ！！！」

「ばっ化け物がああ！！！」

「おっお前ら怯むな！？やれ！！！」

ほう今度は全員か。

まず一人目は大剣を振りかぶった所を腕と一緒に顔半分を斬り落とす。

二人目と三人目はメリケンサックで殴ろうとした所をサイドステップで避け、二人が重なった状態で心臓を刺突で鼓動を止める。

四人目は斧で尻ぎ払いをしたが身をかがめて避け、そのまま下から上に斬り上げ殺す。

「返り血がひどいな」

五人目はアリスさんを襲おうとしたので

「《風よ斬り裂け（カマイタチ）》」

風の刃を放ち、上半身と下半身に分ける。

「スノウ……………すまん先に宿屋に行つとく。場所はカウンターに言
つておいた。」

どうやらアリスさんは宿屋に向かうようだ。……………裏口から

「この女あああ!!」

どうやらあいつらを逆ギレさせたようだ。

まあいいか狙つてんの何故か俺だし。

六人目から頸動脈を斬り裂いていく。そのたびに血飛沫が上がり、
返り血を浴びていくが、関係ない。

そして……………

「ゆっ許してくれ」

「ボスなら責任とれ」

俺は最後の奴を袈裟斬りで終わらす。

「ふう〜やっと終わった。つか返り血びっしょりついてやがる《水
よ清める(クリア)》」

よし返り血が跡形もなくなったことだし。

「おい店主、さっきの女性が言ってた宿屋の場所教えて〜」

その夜

「あのさアリスさん？」

「どうしたスノウ」

「なんで同じ部屋？」

「仕方ないだろ、ひとつしか空いてなかったんだ」

はあマジかよ

「分かりました。そういや俺のギルドランクなんですか？聞いてないんですけど」

「ああランクは私と同じギルドで最高のSSランクだ」

「凄!?!」

「それよりスノウの方が凄いぞ《土よ縛れ(チェーンバイト)》」

突然、地面から鎖が出てきて俺の四肢を縛る

「って何をするんですか!?!」

「ふふっ 実はある時のお前を見て、体が疼いてな／＼」

ガチャガチャ

「ちょ／＼ズボン脱がさないで／＼」

「うわっ／＼意外とおつきい／＼いただきます」

「／＼やめてええええ!!」

この日、俺はアリスさんによって眠れない夜を過ごした。

女性騎士から見た少年

SIDE アリス

チュンチュンチュンチュン

小鳥のさえずりが聞こえ、目を覚ます。

私の名前はアリス・キングダム。16歳で旅をしている。ふと隣を見ると、雪のような白い髪を持つ少年が寝ている。彼の名前はスノウ・クリスタル。まさに雪の名前を持つ少年。ちなみに昨夜、営みをした仲である／／／……………でもあれって私が襲ったのではないか？

……………まあ彼の魅力で発情／／／したから／／／

「ん〜？もう朝かアリスさん」

どつやら彼が起きたようだ。目をゴシゴシして起きる姿はかわいい後輩を見ているようだ。

「ああおはようスノウ」

「おはよう、ア……………リスさん／／わあ！？早くなんか着ろ！？

／／／

いきなり赤くなつて後ろを向く彼。……あつ今、私、服着てない。でも本当に彼はかわいい。普通、女の方が恥ずかしがるのでないか？なんか掛け布団で体を隠そうしているが。

それにしても不思議な少年だ。普通にしている時は、かわいいお兄ちゃんや後輩に見えるのに、いざ戦闘になると無表情になり、冷徹で残酷な気配を醸し出す。／／／だがその人々が恐れる気配が好きだ／／／だつてあのゾクゾク感がたまらない／／／

「アリスさん……何ニヤニヤしてんすか？／／／つか早く着なさい！！」

！？いけない。またあの快感を味わう所だった。

急いでマジックドレスを着て、鎧に手を伸ばそうとすると……鎧が変わっていた。

「あつ、アリスさんすみません鎧、寿命がとつくにきてたのでバラムの鱗とかで改造しときました。勝手にすみません」

「いやいい。ありがとう」

本当に彼は優しい。ただ私のために鎧を改造をするとは……まあ一応どんな風になつてるか調べるか。そう思い、色が漆黒となつた自らの鎧を

「《風よ調べの力を我が瞳に宿せ（サーチ・眼）》」
調べるのであった。

名称 黒天の鎧

材質 王鋼 バラムの鱗 アクアタイガーの毛皮

防御力 EX

機動力 EX

防魔 EX

付加能力

防刃 EX

魔法吸収 EX

体力上昇 E X

魔力上昇 E X

自然治癒上昇 E X

「スノウ……………あなたやり過ぎという言葉を知っていますか？」

「なんで？アリスのために丈夫にしたのに」

「……………なんて嬉しい言葉が無自覚で！？」

数時間後

「で次、どこの町に行く？」

「そう、今回の旅は元々、私の力を伸ばす修行の旅なのだが彼と旅をすることになったため方向性を変えないと」

「別に気ままに旅してもいいんだけど俺？」

「スノウ……」

くっ／＼／＼なんでそこで微笑むかなあ

「そういやマヤツリって町で武闘大会が開かれるみたいですね」

「そういやあつたな、私も出てみたいと思ったけど」

「じゃマヤツリに決定ですね」

いいのか？そんな決め方で

古龍再び……そして婚約指輪

トリミア王国から出発して数日が立ち、俺とアリスは馬車に揺られていた。

「アリスさん、マヤツリまで後どれくらいですか？」

「後、2日だな」

手綱を持つアリスさんは、軽く微笑み答える。

トリミア王国から出てから夜はアリスさんが見ただけで術式が分かり、自分もその魔法を使える特殊スキル聖霊の瞳を持っていたので俺がアリスさんに合わせて改良魔法を造り、チューンナップスベル実演して見せる。

そして昼間、時々出てくるモンスターどもにそれをぶつけるのだ。

まあ剣の打ち合いを少ししたのだが……

閑話休題

さてそんな修行風景を思い出していると

ウオオオオオオオオ！！

………

「アリスさん、なんか聞いたことがある咆哮ですよね」

「普通、咆哮なんて言葉使わないぞ？……すまん現実逃避して」

「いえ」

だって

ドゴオオオオオオン！！

あの

フウウウウウウウ！！

バラムがいらっしやるのですから！？

「アリスさん………ランクEXって普通、滅多に出会いがないですよね？」

「当たり前です」

じゃあなんで出てくんのこの馬鹿バラム！？

「スノウ、あの魔法って効くかな？」

「アリスさん、じゃ試して下さい。」

そう言った時、バラムがあの馴染み深い？あの右腕？を前に出す動作をする。

するとあのガーゴイルが数十体に加え、襲ってくる。

「アリスさん、雑魚は任せてくれ。《氷よ貫き爆ぜよ（アイスジャベリン・爆）》」

俺はガーゴイルの数にあわせた数の八面体の氷を放つ。ガーゴイルに当たり、半分ほど貫いた氷は爆ぜ、ガーゴイルは氷の彫刻となる。

「はああああああ！！」

アリスさんが魔力を練り始めた。どうやら最大威力でやるようだ。すると今度は地面から岩の巨兵達が出てくる。

「ギガゴーレム、図体がでかいだけだ《雷よ殺戮者の名のもと滅せよ（スパークインパクト・殺）》」

そして俺は片手をギガゴーレムに向け、通常のスパークインパクトの数倍の黒い雷の砲撃を放ち、ギガゴーレム達を一掃する。

ギガゴーレムを倒した瞬間、またゴブリン達が弓矢を持ってやってくる。

「……………雑魚すぎ《火と風よ戦場より荒れ狂え（テンペスト・広）》
「

前回と同じく、火を纏った竜巻でゴブリン達を灰と化す。それと同時にアリスがバラムの頭上までジャンプして

「《光よ王の名のもとで浄化の斬撃を放て（ホーリーセイバー・王）》
「

まばゆい光の斬撃を放ち、バラムを一刀両断する。

「……………効いたな」

「効きましたね」

なんたるこの呆気なさは

「スノウ／＼／」

ドンー!!

アリスさんに押し倒された……………

「ってなんですか!?!」

「フフ／／分かるだろ《土よ縛れ(チェーンバイト)》」

地面から鎖が出てきて俺の四肢を縛る。

「……………もしかして／／」

「ああ／／本当にお前は最高だ」

「ここ／／外です!?!」

「いいだろ／／もう待てない」

「にゃあああああ!?!」

数時間後

「うっ／＼／」

足腰が立たない／＼／

「あゝすまん／＼／やり過ぎた」

「……………もうお婿にいけない／＼／」

だって／＼／あんな激しくて無理やり／＼／

「……………もらってやる／＼／」

????

「今、なんて？」

「だから私が婿にもらってやる／＼／」

「えっ!？」

「私じゃダメか？」

……………思い返してみれば朝からアリスさんの顔を見て起き、昼間は馬の手綱の持つアリスさんの横にいて、夜はアリスさんと修行して最近では夢にもアリスさんが出てくる。

「……………悪くないかもな」

「ならこれ／＼受け取ってくれ」

そしてアリスさんの手から二つの指輪が渡される。

「普通、男からじゃないか」

「いいじゃないか／＼」

まあいいか。そして俺は真っ赤になったアリスさんの左手の薬指に指輪をはめ、今までの愛を込めて、クチビルを合わせる。

マヤツリで申し込みと勇者とお色気魔術師

武闘の町、マヤツリ。

元々奴隷の町だった。この町に二人の女奴隷がいた。名はマヤ・リオとツリー・グランド、彼女らは最初、貴族に慰め者として買われたが、その時近くにあった剣と槍を取り、その貴族を殺した。奴隷商人は怒り狂い、奴隷にとって最悪の場所、コロシウムに放り込んだ。だが奴隷商人の思惑とは裏腹にマヤ・リオとツリー・グランドは勝ち進み、そしてある日、他の奴隷と手を組み、反乱を起こし、奴隷達は自由となり、二人の栄光を称え町の名前をマヤツリと変え、毎年二人一組で闘うマヤツリ杯が開催される……………

「あゝ良かったですねアリスさん、元々二人一組でしか申し込み出れないみたいだし」

「そうだなちょうど良かったな。これで優勝賞金を手に入れて結婚資金に……！」

はい、今マヤツリに到着し、大会の申し込みに来ています。

それにしてもアリスさん、なんでそんな堂々と結婚資金なんて言うんだノノノ

つかそれって男のセリフ……

「さて試合は明日だし、宿屋にいくぞスノウ」

「へっ！？ああ今、行く……！」

申し込みが終わったアリスさんが宿屋に向かっていったので急いで追いかける。何故か受付の女性が羨ましそうな顔をしていたが

数時間後

さて宿屋に着いた俺達だが

「すまん……………また部屋一つしか空いてなかった。」

「いや別にいいだろ。どうせ近いうち結婚するし」

しかもお金浮くしね

「そつ／＼そつだな」

そんな話しをしていると

ドンー！！

「すつすみませんー！！」

なんと現在、勇者をやっている神崎結がぶつかってきた。

SIDE 神崎結

お城から雪君が消えて数日、王様や皆さんは雪君が裏切って兵の皆さんを殺したっていうけど……私は雪君を信じる！！だって／＼私、雪君が好きなんだもんだから私は魔法や剣の修行を頑張った。今回は俗にいうお色気担当みたいな服装の城に仕えていた魔術師マリサ・ティアラさんと一緒にマヤツリに武闘大会に出るのだ

ドン！！

「すつすみません！！」

しまった。人にぶつかっちゃった。

「いや大丈夫だ」

見てみると髪が雪のような白い髪とエメラルドみたいな翡翠色の瞳を持った男性が立っていた。

「いえいえ私が悪かったですから」

「スノウ、どうしたんですか？」

「ん？アリスさん、いやねこの子がぶつかってきてね」

今度は金髪で青いドレスの上に真っ黒な鎧を着た綺麗女性……………アリスさんっていう人がやってきた。

それにしてもアリスさんとスノウさん？って美男美女だな

「二人ってどんな関係なんですか？」

「もちろん近いうちに結婚する仲だ!!」

「アリスさん／＼だからなんで堂々と言えるんですか!？」

なんだろこのノロケっぷり……………というより男女逆転してるよ

「勇者様〜どうしました？」

あっマリサさん。

「さてそれじゃ」

「スノウ、部屋行こうか」

二人はどうやら部屋に戻るようだ

キュピーン!!

あっマリサさんの目が光った。

「ねえ、そこのお兄さん、あたしといいことしない?」

うわっマリサさん。さっそく誘惑してるよ

「断る。俺はアリスさんが居てくれればそれでいい」

スノウさんがすごい目つきですごくカッコいいセリフを言って、部屋に行った。

「……………」

「マリサさん?」

やっぱり、シヨックだったのかな？そんな露出度凄く高い服着て、男に振られるの

「気に入った」

「へ！？」

「気に入ったわあの男。絶対あたしのものにしてみせる」

あはは、開き直っちゃた。

S I D E ス ノ ウ

さて部屋に入ると

ドサッ！！

アリスさんに押し倒された。

「ってまた！？／／／」

「だって／＼はむっ」

「はにゃ／＼!?!?」

耳が!?!?というが体に力が入らない／＼／

「フフ／＼／ここ弱いよね。では／＼／」

「にゃあああああゝ!?!?!／＼／」

なんでこうなる／＼／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0399k/>

異世界に召喚された殺し屋で天才科学者な少年

2010年10月9日01時43分発行